# 豊かな音楽表現を目指して

堀　正文（ほり まさふみ）
ＮＨＫ交響楽団名誉コンサートマスター
桐朋学園大学名誉・特命教授、東京藝術大学特別教授
公益財団法人 日本交響楽振興財団 評議員

昨年６月に評議員に就任した堀正文です。よろしくお願い申しあげます。私はＮＨＫ交響楽団の第一コンサートマスターやソロコンサートマスターを35年（1979～2015年）務めたのち、現在、桐朋学園大学や東京藝術大学で後進の指導・教育に当たっています。

評議員になるのはすこし不安がありました。しかし、尊敬する海老澤敏先生もメンバーであり、また交響楽振興財団の「巡回公演」を見ると、知人・友人が数多く出演しており、評議員としてお役に立てるのではないかと思うようになりました。さらに、ここ数年の『財団ニュース』を拝見すると、近しい方々が健筆を揮っている。大学やコンクールの審査でご一緒することの多い梅津時比古さん（音楽評論家、元桐朋学園大学学長）、澤和樹さん（ヴァイオリニスト、元東京藝術大学長）、昨年４月から私の古巣であるＮＨＫ交響楽団のゲスト・コンサートマスターを務める郷古廉くん、東京交響楽団の評議員長・最高顧問である金山茂人さんなどです。金山さんとは同郷の縁で、2012年12月に私の出身地である高岡で東京交響楽団とモーツァルトのヴァイオリン協奏曲第５番を演奏したことがあります（指揮を務めた現田茂夫さんのご尊父も富山県滑川市出身とか）。

**高岡、京都、フライブルク、蓼科、東京**

簡単に自己紹介させていただきます。私は1949年６月に富山県高岡市に生まれました。母親は宮城道雄の生田流箏曲の師匠で、私も幼いころから自然に箏に親しんでいました。しかし、３歳のある日、老人ホームで六段の調「千鳥」を慰問演奏したとき、畳に正座して弾いたため脚がしびれてしまいました。四つん這いで退出したのが子ども心にもはずかしく、それ以来箏に触れなくなりました。とにかく腕白で落ち着きがなかった。両親は箏の代わりとなる習いごとを探し、そこで出会ったのがヴァイオリンです。しかし、やんちゃなところは変わらず、私はヴァイオリンの弓を、兄は算盤を刀にチャンバラをしていました。

私が音楽の道に進むことになったのは、坂本栄三先生に師事したからです。先生のお勧めもあり、京都市立堀川高校（現在は京都堀川音楽高校）に進学しました。新入生40人中男は私だけで、自然に１学年上の小泉和裕（指揮者）さんや２学年上の店村眞積さん（東京都交響楽団特任首席ヴィオラ奏者）など上級生と接する機会が多くなりました。

高校卒業後は日本の大学には進まず、ドイツのフライブルク音楽大学に留学しました。師事したのはウールリヒ・グレーリング先生とヴォルフガング・マシュナー先生。レッスンの課題は多く、こなせるかとても不安になりましたが、不可能なことを課題に出すはずはないと肚をくくり、練習に励みました。入学して２年後の71年には助手、73年には講師に採用されました。日本では考えられないことですが、ドイツでは学生でありながら教えることができるのです。73年に卒業し、74年にはダルムシュタット州立歌劇場のコンサートマスターに。本場ドイツでオペラを数えきれないぐらい演奏できたのは一生の宝となりました。

1978年の夏、蓼科音楽祭に参加し、ＮＨＫ交響楽団のコンサートマスターを務めていた田中千香士さんと徳永二男さんに出会い、共演などを通じて親しくなりました。２人の薦めやいくつかの要因が重なり、翌79年９月にコンサートマスターとしてＮ響に入団しました。35年在籍し、多くの音楽家と共演しました。指揮者だけでもマタチッチ、ヴァント、サヴァリッシュ、スウィットナー、ノイマン、ライトナー、ホルスト・シュタイン、ブロムシュテット、デュトワ、アシュケナージ等々。コンサートマスターなので練習や本番以外の時間にも、指揮者やソリストの話を聞かなくてはならない。音楽的には有益でしたが、飲食を伴うことが多く、のちのち健康面で苦労することになります。

よく「いい指揮者とは？」と聞かれます。指揮者が目指す音楽に楽団全体が賛同し、この人のためなら力尽きるまで演奏しようと、その気にさせるのがよい指揮者なのではないでしょうか。若い演奏家についても聞かれます。演奏力は目を見張るほど向上している。しかし、技術が高いからといって的確な表現ができるわけではない。技術があって音楽があるのではなく、音楽が技術を求めているのです。曲が求めているものを的確かつ豊かに表現しなければならない。そのための技術です。表現力をつけるにはいろいろありますが、歌心を持つのもひとつでしょう。声楽家はいうまでもなく、管楽器奏者もブレス（息継ぎ）を通じて常に歌を意識している。若い弦楽器奏者にはそうした意識が少ないと思います。弦の奏者も自ら歌い、またオペラを聴くなどして表現力を豊かにしていかねばならないと思っています。

# 2023年度の公演活動（競輪補助事業）について

2023年５月に新型コロナウイルス感染症が５類に移行されたこともあり、オーケストラ活動は以前のような活気を取り戻しつつある。当財団の活動も感染症による制約を受けることなく行われ、2023年度は巡回公演12回（うち楽器演奏クリニック２回）、アマチュアオーケストラ演奏活動５回、特別支援学校オーケストラコンサート３回を予定どおり実施することができた。演奏会の模様をいくつかを紹介したい(敬称略)。

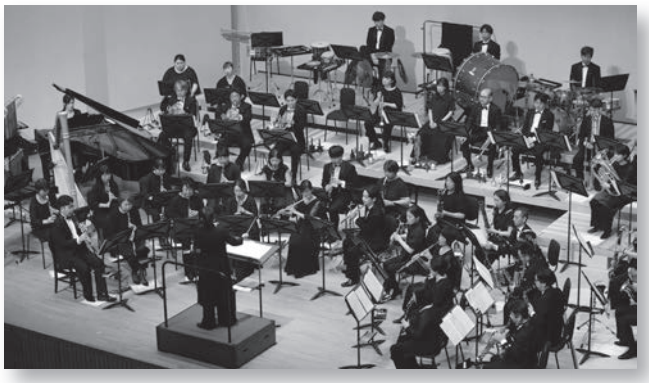
## 若い音楽家とラフマニノフ生誕150年

巡回公演には今年度も多くの若手音楽家が出演した。指揮者では左利きの指揮者として知られ、内外のオーケストラから引く手あまたの出口大地が岡谷公演（新日本フィル）に登場、実力と人気を兼ね備える佐藤晴真とドヴォルザークのチェロ協奏曲を演奏した。佐藤晴真とともにベルリン芸術大学に学び、共演することも少なくない久末航（ピアノ）も、出身地大津での公演（関西フィル）に出演し、ラフマニノフの「パガニーニの主題による狂詩曲」を熱演した。

2023年はラフマニノフ生誕150年、没後80年にあたり、その作品が多く演奏された。前述の「狂詩曲」だけでなく、ピアノ協奏曲第２番を金子三勇士（水戸、東京21世紀管弦楽団）、萩原麻未（庄原、広島交響楽団）、大崎由貴（有田、大阪交響楽団）がそれぞれ情感豊かに弾いた。このほか牛田智大がシューマンのピアノ協奏曲（伊豆、読売日本交響楽団）を、亀井聖矢がプロコフィエフのピアノ協奏曲第３番（豊橋、読響）を演奏した。一方、ヴァイオリンでは成田達輝（水戸、東京21世紀）、廣津留すみれ（精華、関西フィル）、福田廉之介（庄原、広響）、米山友紀乃（長野、オーケストラ・アンサンブル金沢）が、メンデルスゾーンやブルッフのヴァイオリン協奏曲に取り組んだ。

## シエナ・ウインド・オーケストラの四国中央公演

全国約4,800の高校のうち吹奏楽部があるのが3,650校、オーケストラ部があるのは100校といわれ、管楽器を通じて音楽に親しんでいる青少年の数が圧倒的に多い。吹奏楽団はこれまで巡回公演に出演していなかったが、四国中央公演には吹奏楽の名門シエナ・ウインド・オーケストラが登場した。田中祐子の指揮でショスタコーヴィチの祝典序曲やジョン・ウィリアムズの「スター・ウォーズ」メインタイトルなどを演奏。大きく響いた金管の音色に、来場した地元中学・高校の吹奏楽部員たちは「プロの音は違う」と感じ入っていた。



四国中央公演（2023.7.2　しこちゅ～ホール）
写真提供：しこちゅ～ホール

## 大船渡と第九演奏会

大船渡第九公演（2023.12.3　大船渡市民文化会館リアスホール）
写真提供：東海新報社

新型コロナウイルス感染症の５類移行に伴い、第九など大規模な演奏会が復活しつつある。第九演奏会は大船渡、長野、名古屋（アマチュア、５頁参照）で開催した。このうち大船渡の「けせん第九」は東日本大震災からの復興支援の意味合いもあり、ほぼ２年おきに仙台フィルの演奏で開催してきたが、コロナ禍の影響で2019年の演奏会を最後に中断されたままになっていた。今回、地元の熱意と仙台フィルの格別の協力で４年ぶりの開催となった（指揮は山下一史）。

長野第九のように規模も大きく、老若男女が参加している合唱団がある一方、少子高齢化などの影響を受けて、長年続けてきた第九演奏会を終了せざるをえないところが出ている（大船渡に近い釜石の第九演奏会は2023年12月の公演を最後に45年の歴史に幕を下ろした）。けせんの関係者は可能な限り第九演奏会を続けていくこととしているが、当財団としても地域の活性化にもつながるこうした音楽活動を引き続きお手伝いしていきたいと考えている。

## アマチュアオーケストラ演奏会

アマチュアオーケストラ演奏会は今年度も各楽団の嗜好や強みを生かした楽曲を選択し、多彩な演奏活動

を展開した。2023年に創立50周年を迎えた山梨交響楽団は指揮者に新田ユリを迎え、わが国でほとんど演奏されることがないフサの交響曲第２番「リフレクションズ」を演奏した。一方、2021年に創立70年を迎えた大津管弦楽団は、音楽監督の山川すみ男の指揮の下、スヴェンセンのノルウェー狂詩曲第４番やゲーゼの交響曲第１番を演奏した。

アマオケ演奏会で注目されるのは、プロ奏者との交流が活発に行われていることである。浦和ユースオーケストラの演奏会では、指揮を佐々木新平、コンサートマスター（ＣＭ）を東京フィルＣＭの依田真宣が務めた。演奏会に向けて、小中高生が第一線で活躍する演奏家から直接指導を受け、演奏作品の理解を深め演奏技量を高めるのはいうまでもないが、仲間と一緒に音楽をつくり演奏会をやり遂げることは、楽団全体に何ものにも代えがたい達成感・充実感をもたらしている。

以上が2023年度の活動概要であるが、演奏曲目など詳細については当財団のホームページを参照していただきたい（https://www.symphony.or.jp/）。

**特別支援学校オーケストラコンサート**

2017年度にスタートした特別支援学校オーケストラコンサートは、児童生徒が肢体や視聴覚が不自由なこともあり、街中のコンサートホールに移動するのは難しく、最初の年はオーケストラが支援学校を訪問して演奏する形になった。

しかし、さまざまな困難が予想されるものの、支援学校の多くの子どもたちにオーケストラの音色や響きをよりよい環境で聴いてもらい、また社会との接触をふやしてもらうべく、翌2018年度からは地元のコンサートホールで開催することを基本とし、学校訪問による演奏会も併せて行うこととした（2020～21年度はコロナ禍のため中断）。

2023年度は石川県内３カ所でコンサートを実施した（別表参照。野々市公演は金沢市内の支援学校も対象）。演奏はオーケストラ・アンサンブル金沢（ＯＥＫ）、指揮は2022年９月にＯＥＫの実質音楽監督ともいえるアーティスティック・リーダーに就任した広上淳一。これまでは若手の指揮者がタクトを振っていたが、青少年との交流を図りたいというマエストロの強い希望もあり、わが国を代表する指揮者の登場となった。

ロッシーニの歌劇「セヴィリアの理髪師」序曲やヨハン・シュトラウスの「ラデツキー行進曲」などクラシックの名曲から、ドッドの「ミッキーマウス・マーチ」、久石譲の「さんぽ」など子どもたちにもおなじみの曲を演奏したほか、オーケストラの指揮を実体験するコーナーもあり、会場は大いに盛り上がった。

**2023年度青少年の健やかな成長を育む活動 補助事業**
**（公益財団法人JKA 競輪公益資金補助事業）**

〔巡回公演〕https://www.symphony.or.jp/i_annai_2023_001.html

| | |
|---|---|
| 茨城県<br>水戸市 | 6/10<br>指揮<br>東京21世紀管弦楽団<br>浮ケ谷孝夫、ピアノ 金子三勇士<br>ヴァイオリン 成田達輝 |
| 愛媛県<br>四国中央市 | 7/2<br>指揮<br>シエナ・ウインド・オーケストラ<br>田中祐子、司会 山下まみ |
| 京都府<br>精華町 | 7/8<br>指揮<br>関西フィルハーモニー管弦楽団<br>田中祐子、ヴァイオリン 廣津留すみれ |
| 滋賀県<br>野洲市 | 9/3<br>指揮<br>関西フィルハーモニー管弦楽団<br>藤岡幸夫、ピアノ 久末航 |
| 広島県<br>庄原市 | 9/10<br>指揮<br>広島交響楽団<br>末廣誠、ヴァイオリン 福田廉之介<br>ピアノ 萩原麻未 |
| 和歌山県<br>有田市 | 10/1<br>指揮<br>大阪交響楽団<br>髙橋直史、ピアノ 大崎由貴 |
| 長野県<br>岡谷市 ※ | 10/9<br>指揮<br>新日本フィルハーモニー交響楽団<br>出口大地、チェロ 佐藤晴真 |
| 静岡県<br>伊豆の国市 | 11/26<br>指揮<br>読売日本交響楽団<br>海老原光、ピアノ 牛田智大 |
| 岩手県<br>大船渡市 | 12/3<br>指揮<br>仙台フィルハーモニー管弦楽団<br>山下一史<br>ソプラノ 土井尻明子、アルト 菅野祥子<br>テノール 西野真史、バリトン 小原一穂<br>合唱 けせん「第九を歌う会」inおおふなと合唱団・県内外有志 |
| 茨城県<br>日立市 | 12/23<br>指揮<br>新日本フィルハーモニー交響楽団<br>大友直人、司会 岩﨑瑞穂 |
| 長野市 | 12/23<br>指揮<br>オーケストラ・アンサンブル金沢<br>柳澤寿男、ヴァイオリン 米山友紀乃<br>ソプラノ 廣田美穂、アルト 谷口睦美<br>テノール 渡辺康、バリトン 近藤圭<br>合唱 ながの第九合唱団 |
| 愛知県<br>豊橋市 ※ | 2024年<br>1/27<br>指揮<br>読売日本交響楽団<br>藤岡幸夫、ピアノ 亀井聖矢 |

※楽器演奏クリニック実施

〔アマチュアオーケストラの演奏活動〕
https://www.symphony.or.jp/iv_annai_2023_001.html

| | |
|---|---|
| 山梨県<br>甲府市 | 6/25<br>指揮<br>山梨交響楽団<br>新田ユリ |
| 埼玉県<br>さいたま市 | 8/13<br>指揮<br>浦和ユースオーケストラ<br>佐々木新平 |
| 滋賀県<br>大津市 | 11/5<br>指揮<br>大津管弦楽団<br>山川すみ男 |
| 愛知県<br>名古屋市 | 12/10<br>指揮<br>フィルハーモニカー・ウィーン・名古屋<br>茂木大輔、ソプラノ 川島幸子<br>アルト 三輪陽子、テノール 大久保亮<br>バス 伊藤貴之、合唱 名古屋市民コーラス ほか |
| 愛知県<br>半田市 | 12/17<br>指揮<br>半田市民管弦楽団<br>米津俊広 |

**2023年度日本交響楽振興財団独自事業**

〔特別支援学校オーケストラコンサート〕
https://www.symphony.or.jp/viii_annai_2023.html

| 管弦楽 オーケストラ・アンサンブル金沢、指揮 広上淳一 | |
|---|---|
| 石川県<br>野々市市<br>5/30<br>10：10～<br>10：55 | 野々市市文化会館<br>参加校：石川県立いしかわ特別支援学校、石川県立ろう学校、石川県立もう学校、石川県立明和特別支援学校、金沢大学附属特別支援学校　入場者数：310名 |
| 小松市<br>6/9<br>10：00～<br>11：00 | 小松市民センター<br>参加校：石川県立小松特別支援学校、石川県立小松瀬領特別支援学校、石川県立錦城特別支援学校　入場者数：246名 |
| 穴水町<br>6/15<br>14：00～<br>15：00 | のとふれあい文化センター<br>参加校：石川県立七尾特別支援学校、輪島分校、珠洲分校、穴水町立穴水小学校支援学級、穴水中学校支援学級　入場者数：210名 |

# 音楽との出会いによる地域の文化振興

矢作勝義（やはぎ まさよし）
公益財団法人豊橋文化振興財団　芸術文化プロデューサー

豊橋市は愛知県の南東部にあり、東は静岡県と接し、首都圏と関西圏のちょうど中間に位置しています。東海道新幹線の停車駅があり、東京からは約90分、京都からは約60分で移動が可能な人口約37万人の中核市です。また、豊橋市、豊川市、蒲郡市、新城市、田原市、設楽町、東栄町、豊根村の８市町村で構成する東三河地域の経済・交通の中心地でもあり、海や山に囲まれた地形的な特性を背景に、方言や宗教、食文化などをはじめとして文化的にも愛知県内において独特の風土や文化を保っています。

（2024.1.27ライフポートとよはし）

豊橋は終戦間際の昭和20年６月19日、空襲により焼け野原となりましたが、豊橋文化振興財団の前身となる豊橋文化協会が戦後間もない昭和21年２月に設立され、戦禍にただれた郷土に文化の花を咲かそうとレコードコンサートが催され、リストの「レ・プレリュード」が廃墟となった町に響き渡ったそうです。やがて様々な分野で多くの文化団体が相互に影響しあい、自立発展していったことが、今日の市民による文化活動の礎となり、邦楽・洋楽を問わず様々な音楽活動が活発に行われる地域になりました。

そのような中、昭和37年ＮＨＫ全国合奏コンクールで全国一になった豊橋市立羽田中学校のリードバンド部を母体に、豊橋リードフィルハーモニー交響楽団が昭和40年に発足し、そののちアマチュアオーケストラの豊橋交響楽団に発展していきました。現在は、下は高校生から上は60歳を超える方まで年齢層も幅広く、東三河を中心に各地域から集まった100名余の団員で活発に活動しています。さらには、ピアノ、管弦楽、吹奏楽、合唱など豊橋では様々な市民による音楽活動が行われています。また、市内の中学校・高校の管弦楽・吹奏楽の活動も盛んに行われています。特に中学校では珍しいオーケストラ部が、羽田中と牟呂中の２校にあり、日本学校合奏コンクールに出場して優秀な成果を上げています。まさに、豊橋市は青少年から大人まで幅広い年齢層による音楽活動が活発に行われている地域といえます。

そうした市民自身の音楽活動をサポートするだけでなく、一流の演奏家による音楽鑑賞の機会を提供することも豊橋文化振興財団の重要な役割であり、日本交響楽振興財団様との共催によりオーケストラによる演奏会（巡回公演）を開催しています。2023年度は国際的に活躍する藤岡幸夫氏の指揮、ソリストにロン＝ティボー国際コンクールに優勝し、人気沸騰中の亀井聖矢氏の共演ということで注目が集まり、非常に多くの市民の皆様にご来場いただき、読売日本交響楽団の迫力あふれる演奏をお楽しみいただきました。

同時に豊橋市の未来の音楽人材育成のため、演奏会の前に羽田中と牟呂中オーケストラ部の12パート77人の生徒を対象に、楽器演奏クリニックを開催しました。講師は読響の首席奏者など楽団員で、プロの演奏家からの指導は参加した中学生に普段の練習だけでは得ることのできない気づきを与え、今後の演奏活動の大きな糧になりました。

こうした演奏会の開催だけにとどまらない活動ができるのも、競輪の補助事業と日本交響楽振興財団様のご支援の賜物だと感謝いたします。

（2024.1.27楽器演奏クリニック）
写真提供：公益財団法人豊橋文化振興財団

# ウィーンの響きを求めて
## ～３年越しの「歓喜の歌」～

神山竜太（こうやまりゅうた）
フィルハーモニカー・ウィーン・名古屋

フィルハーモニカー・ウィーン・名古屋（ＰＷＮ）は「ウィーンの響き」の追求をコンセプトに、2011年に設立されました。当団の特徴として、ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団（WPh）が使用している物と同様の、独特の音色を持つウィーン式の楽器を、関係セクションの全員が使用していることがまず挙げられます。有名なウィンナ・ホルン、ウィンナ・オーボエを始めとして、ウィーン・アカデミー式クラリネット、ウィンナ・ティンパニ、ウィンナ・テューバ……中には、彼の地でも見かけることが少なくなってきたものもあります。また、これら楽器を使用するのみならず、WPhの団員やOBを指揮者やソリストとして招聘し、その薫陶も受けております。加えて、オペラへの出演も行っているところも、国立歌劇場管弦楽団が本業であるWPhに倣っているといえるでしょう。その他、高めのピッチ、舞台配置やカーテンコールの立ち方、プログラム等のデザインに至るまでWPhを意識しています。このようなこだわりに賛同し、名古屋近郊のみならず関東や関西から参加する団員も多く在籍しています。

写真右　ウィンナ・ホルン　写真提供：PWN

今回は12月10日に、愛知県芸術劇場コンサートホールにて、NHK交響楽団の元首席オーボエ奏者で、数多くの著作でも知られる茂木大輔先生を指揮者にお迎えし、第19回演奏会として、ベートーヴェンの交響曲第９番「合唱」と「合唱幻想曲」を演奏いたしました。

当団では、ブルックナー、マーラー、R.シュトラウス等の大規模な作品も取り上げる一方、2017年から「ベートーヴェン・ツィクルス」として、５回の演奏会で交響曲全９曲を演奏する予定でしたが、生誕250年の2020年夏に予定していた最終回（第８番と第９番）は、コロナ禍により中止と相成ってしまいました。活動再開後も、当初は合唱入りの「第九」は困難であるため、まず第８番を「英雄」の再演と組み合わせて実施。その後もソリストや合唱団、ホール確保の関係もあり、間に５回の演奏会を挟み、ようやくこのたび実現できたものです。

さて、「第九」に新たに組み合わせた「合唱幻想曲」はピアノ独奏と独唱者６名を要するため、今回のソリストは全11人。スケジュール調整は難航し、加えて約170名の合唱団の客席への出入り等の取り回し、チケットの配布数の調整など、演奏以外にも課題山積となり、日々頭を悩ましておりました。

演奏については、茂木先生との共演は４回目でしたが、今回はとりわけ練習に熱が入り、かなり厳しいお言葉もいただきました。ウィーン式の楽器は、現在一般に使われている物より古いタイプのもので、だからこそ固有の音色を残しているのですが、機能面からは演奏至難であり、奏者泣かせのものです。「楽器を言い訳にするな」「楽器だけ使っても吹けないなら意味がない」旨の叱責もいただき、心が折れそうにもなりましたが、それまでの無意識の「難しいから仕方ない」という甘えを払拭し、一段上を目指す機会になったかと感謝しております。

そのようにして迎えた本番は、茂木先生の熱い指揮の下、ソリストの方々や合唱団の素晴らしい演奏にも恵まれ、ご来場いただいた満席に近いお客様にもご満足いただけたかと思っております。また、このような大規模な演奏会を開催するにあたって、競輪の補助と日本交響楽振興財団のお力添えをいただけたことは、大きな助けになりました。団員一同、心より感謝申し上げます。

# ことば

©Seiichi Saito

佐藤晴真（さとう はるま）
チェリスト

**文学と音楽について**

ふとした時に読みたくなる詩がある。

中原中也作『一つのメルヘン』。河原の情景を幻想的に映し出す作者の代表作である。その中でも印象的なのが、「さらさら」というひとつの擬音が３回違う意味を持って繰り返される点だ。その音楽的とも言える表現に、当時高校生だった私は衝撃を受けたのを鮮明に覚えている。

その時期ちょうど勉強していたブラームスの『チェロとピアノのためのソナタ第２番』と通じるところを感じていた。第１楽章では冒頭のメロディーがテンポや和声を変え、楽章の最後にもう一度出現する。その効果はまるで同じ場所を違う季節に見るように、様々な感情を巧みに呼び起こさせる。作品の中でストーリー性を長く強く形作るこの構成は、ブラームスの常套手段だ。

私は小学校５～６年生の頃、２年間だけだったがシュタイナー教育に触れる機会があった。当時週に一度、オイリュトミーと呼ばれる、シュタイナー教育の総合芸術を重視するカリキュラムの中でも特に独創的な科目を習っていた。音楽や文学作品に合わせて体を動かすのが素直に楽しく、夢中で取り組んでいた。

少し詳しく説明すると、オイリュトミーというのは極めて感覚的なパフォーミングアートのひとつで、ピアノなどのクラシック音楽の演奏に合わせるものもあるが、言語とも密接な関係を持ち、詩や物語などの文学作品を身体で表現する。子音・母音ひとつひとつに身体の構え方が決まっており、それらを組み合わせ繋いでいくことで、作品を通した動き方が決まるのだ。『一つのメルヘン』に出会ったのは、そのオイリュトミー教室を卒業した後、先生の公演を見に赴いた時だった。先生の動きは、詩が進むにつれて「さらさら」の持つ音の意味がひとつずつ重くなってくるように感じられ、子音・母音の構え方にとどまらず文学作品の芸術性そのものを見ている感覚すら覚えた。

その経験から、自身の内面、ひいては文学作品の意味するところと向き合い、微妙なニュアンスを突き詰めるこだわりの大切さを学んだ。

一方で、作品の言葉・演じる身体・それを受け取る観客との繋がりに、それまでクラシック音楽の演奏会で体験してきた空気とまったく似ていることにも気付かされた。その違いはただ、そこに文字と身体あるのか、それとも音符と楽器があるのか、だ。

言葉も音楽もおおもとを辿れば音であると言える。言葉を音という元素にまで戻して丁寧に表現してみようとすると、不思議と演者にも観客にもその言葉の意味が生き生きと立ち現れてくる。

言葉と音、文学と音楽の関係について考えるようになったのは、この時からかもしれない。

**学び**

コンサート活動にはインプットとアウトプットのバランスが重要だと常々思っている。後者が多い生活は演奏家としては幸運なことである。しかし裏を返せば、外に向かう意識が続けば続くほど、研鑽の中で得る小さな学びの積み重ねが底をつき、芸術に対峙する身としてのインスピレーションが枯渇していくような気がしている。

私の考える“学び”とは、第１に語彙を増やすことである。音楽表現はイマジネーションの豊かさに、イマジネーションはまず語彙の多さに起因するところが大きいと思う。音楽が全て言葉で表現できるかと問われればそうではないけれど、私はどんな小さなフレーズにもできる限り音のイメージに合った単語を考えるようにしている。この自分の内面との対話の中で黙々と探す“内を見る学び”とも言える作業が、芸術家には絶対的に重要なのである。

第２に、誰かと共演したりレッスンを受け刺激をもらうことも大変貴重な学びである。“内を見”てとことんまで深めた分だけ、受けたその刺激からより多くを学びとることができる。自分には思いつかなかった音楽に対するイメージや、自分にはない表現方法を誰しもが持っている。どれだけ細やかに相手の意見との違いに気付き、その双方の良さや修正点を理解できるか。これは“外から見た学び”とでも喩えられるべきか、今度は相手と同じ視点で自分自身を客観視する必要がある。

これら２種類の学びのプロセスはとても楽しいのだが、決して楽ではなく、なにせ時間のかかる作業なのである。演奏会がひと月にいくつもあると、その楽しさをも忘れてしまいそうになる瞬間が時々あるのだ。

そんなとき私は決まって、言葉の力を借りている。自分が好きで始めたはずの音楽がいつの間にか仕事の感覚に追われてしまっているとき、素晴らしい文学作品はそのせかせかと忙しい心を時間旅行に連れ出してくれる。

私はふと立ち止まって、中原中也の描く景色に浸り、それに出会った日の感動を何度も噛みしめる時間を旅するのが好きだ。思えば文学作品たちもまた、まだ見ぬ読者のもとへ渡り、その景色を彼らの想像の中で淡く、それでいてくっきりと復元させるため、果てしない時間旅行を楽しんでいる途中なのかもしれない。

**ルーツと行く先**

国語教師である両親のもと育った私は、いつからか漢字辞典を読み込むほど字そのものに関心を寄せていた。詩や短歌などの文学作品にも魅力を感じるようになるのも、自然な流れだったように思う。

また教育に対しても同様で、昔から数学や理科など当時はあまり興味を持てずにいた普通科目においては、「いつか自分の子供を育てるとき、教えられるように」と思いながら勉強していた。今となっては笑える話だが、少年時代の私には既に教育が念頭にあり、そうでないとモチベーションを保てない、ある意味でませた少年だったのである。

両親の話の関係でもうひとつ、大切にしている言葉がある。「これからは自分との闘い」。両親は同じ教育大学で勉強していたが、特に２人がお世話になった先生が私にかけてくださった言葉だ。私が高校生の時、国内コンクールで優勝した直後の披露演奏会をわざわざ聴きに来てくださったのだ。その先生には初めてお会いしたのだが、威厳がありながら教育者としての懐の深さを感じさせるその姿に、自然と背筋が伸びたのをよく覚えている。

自分もいつかは教育に携わりたいという思いは常にあるが、自分自身に何か足りない、もっと勉強がしたいという意欲も共在している。2024年の秋から、しばらく休んでいたベルリンでの勉強を再開する予定だ。また海外で研鑽を積み、昨日までは知らなかった自分に出会えるのが楽しみで仕方ない。

今まで名古屋では林良一先生、東京では山崎伸子先生と中木健二先生、そしてベルリンではイェンス＝ペーター・マインツ先生に師事してきたが、いつも不思議に思うほど素晴らしいご縁に恵まれてきた。先生方から受け継いだかけがえのない教えの数々で、今の自分はできている。

今の自分に、核心をつく言葉を生徒に与えることができるだろうか。その問いに答えを持てる日が来るのは、まだ先になるだろう。寧ろ、暫くはまだ先のことであると感じている人でありたい。

そうしていつの日か自分の生徒を教えるときには、それまで自分のために積み重ねてきた大事な言葉たちを、次の時代の一人ひとりに贈りたい。

# 指揮者たちの「宴」

井形健児（いがたけんじ）
広島交響楽団　事務局長

広響の愛称で市民に親しまれている広島交響楽団は、1963年に市民交響楽団として発足し、昨年創立60周年を迎えた。2024年４月からは、クリスティアン・アルミンクが第８代音楽監督として就任することが決まっている。外国人指揮者を音楽監督に迎えるのは楽団史上初となる。

指揮者とは不思議な職業だ。他の音楽家と大いに異なり、自ら音を発しない。自ら舞台に立ち、音楽は表現するけれども、実際に音を出して演奏するのはオーケストラである。指揮者ひとりでコンサートを開催することができない。にもかかわらず、ドラマや映画の主人公に選ばれるなど、常に注目と話題を集め、オーケストラにとってなくてはならない存在である。

「指揮者になりたい」と思ってその道を志し、さらにその中から選ばれた一握りの才能が指揮者を職業とすることができる。2024年２月に指揮活動60周年を迎えられた第６代音楽監督の秋山和慶は、その著書の中でプロの音楽家になりたいと言っただけで、小澤（征爾）さんが齋藤（秀雄）先生に「こいつ指揮者になりたいんだって」と紹介されたことがきっかけだった、と語っている。しかし、そんなことは稀であるし、その境遇を受け入れ、才能を開花させたのは紛れもなく秋山自身の努力の賜物である。

指揮者はスコアを読むことに多くの時間を割く。楽譜から作曲家の意図を読み込んでいくのだ。音楽学者はさまざまな文献や歴史的背景、作曲家の人生等を勉強し推測するが、指揮者はさらにそこからリハーサルと本番を通して実際に音楽を創造し実践する。その体験から導き出される推察は、指揮者にしかたどり着けない境地がある。次期音楽監督に就任するクリスティアン・アルミンクは雑誌の取材の中で、「何度も演奏した曲であっても、曲を解釈する上での新たな手がかりが演奏のたびに見つかる」と答えている。

左から、下野竜也氏、クリスティアン・アルミンク氏

指揮の基本は正確に拍子を刻むこと、と言われるが、実はそうではなく、一瞬早く合図を出すことで、その一瞬にオーケストラが反応する。音楽が動くその直前に、それを正確に察知する何らかの合図が指揮者から送られているのだ（指揮者の頭の中では常に一瞬早く音楽が進行している）。合図とともに表情や強弱等、細かなニュアンスが加えられる。まるで舞台俳優のようでもある。身体全体を使って表現する指揮者もいれば、顔の表情や目線など最小限の動作でオーケストラを自在に操る指揮者、一切汗をかかない指揮者もいれば、汗だくになって指揮する指揮者まで、見ていて飽きることはない。

リハーサルは短くて１日、長くても３日間で一公演の演目を仕上げていく。優秀な指揮者ほど、リハーサルにおいてオーケストラへの指示は言葉巧みである。そしてよく喋る。理論的な説明から、興味深い例え話まで様々だ。現在音楽総監督を務める下野竜也のリハーサルは見事というほかない。演目に応じた綿密なリハーサルプランが事前に示され、演奏者への配慮も怠らない。それでいて芸術的深みを追求し、完成度を高め、妥協を許さない。それを与えられた時間内に効率よく仕上げていくのだ。「神は細部に宿る」という言葉が印象に残る。

2024年度は４月13日のクリスティアン・アルミンクの音楽監督就任披露公演を皮切りに、国内外の名指揮者たちを迎えて多種多様の「宴」が開催される。広響の2024年度のラインナップに是非注目してほしい。

広響2024年度ラインナップ一覧はこちら

## ご支援いただいている団体・企業

### 団体

（一社）日本建設業連合会　石油連盟　（一社）日本鉄鋼連盟

ほか

### 企業

朝日生命保険㈱
旭化成㈱
アサヒグループホールディングス㈱
岩谷産業㈱
ＡＮＡホールディングス㈱
ＥＮＥＯＳホールディングス㈱
（公財）オリックス宮内財団
王子ホールディングス㈱
㈱河合楽器製作所
キッコーマン㈱
キヤノン㈱
キヤノンマーケティングジャパン㈱
ＫＤＤＩ㈱
三機工業㈱
清水建設㈱
信越化学工業㈱
住友化学㈱
住友商事㈱
住友生命保険㈱
住友林業㈱
セイコーグループ㈱
積水化学工業㈱
損害保険ジャパン㈱
㈱大和証券グループ本社
第一生命ホールディングス㈱
大成建設㈱
武田薬品工業㈱
中外製薬㈱
㈱電通
トヨタ自動車㈱
東京海上日動火災保険㈱
東京ガス㈱
東レ㈱
（一財）凸版印刷三幸会
㈱ニフコ
㈱日新
㈱日清製粉グループ本社
日本ガイシ㈱
日本製紙㈱
日本製鉄㈱
日本生命保険㈱
野村ホールディングス㈱
浜松ホトニクス㈱
㈱日立製作所
東日本旅客鉄道㈱
㈱フジテレビジョン
富士通㈱
富士フイルム㈱
本田技研工業㈱
前田建設工業㈱
丸紅㈱
三井住友海上火災保険㈱
三井不動産㈱
三菱重工業㈱
三菱商事㈱
三菱地所㈱
三菱電機㈱
三菱マテリアル㈱
明治安田生命保険㈱
㈱ヤマハミュージックジャパン
ユニ・チャーム㈱
㈱龍角散
ローム㈱

## 編集だより

□能登半島地震で犠牲になられた方々のご冥福をお祈りするとともに、被災された皆様に心よりお見舞いを申しあげます。

日本交響楽振興財団は巡回公演や特別支援学校オーケストラコンサートで、オーケストラ・アンサンブル金沢（ＯＥＫ）とともに能登の街を何回も訪問しています。七尾や穴水、珠洲での演奏会には、輪島をはじめ能登の全域から来場いただきました。平穏な生活が１日も早く戻り、また一緒にオーケストラ演奏を聴けることを望んでいます。

□巻頭言は昨年６月に評議員に就任いただいた堀正文さんにお願いしました。ＮＨＫ交響楽団のコンサートマスターとして、多くの巨匠と数々の演奏をしてこられた堀さんに音楽表現などについて語っていただきました。演奏家では新進気鋭のチェリスト佐藤晴真さんが執筆。「語彙の多さは豊かな想像力や音楽表現につながる」と、文学作品に親しむ佐藤さんのエッセイをぜひご一読ください。

各地の音楽事情については、豊橋の矢作勝義さんにご寄稿いただきました。豊橋での巡回公演は例年１月下旬～２月初旬に開催されるため、締切の関係でこれまで原稿依頼を控えていましたが、今回オーケストラのまち豊橋の魅力を存分に伝える手記を寄せていただきました。

プロオケでは広島交響楽団の井形健児事務局長にご登場願いました。創立60周年を迎えた広響指揮者の横顔をスケッチするとともに、指揮者の役割について多角的に記述していただきました。アマオケでは、ウィーン・フィルの響きを追求するフィルハーモニカー・ウィーン・名古屋の神山竜太さんが、同団のこだわりや熱のこもった練習の模様を紹介してくれました。

□校了間際に悲しい知らせが入ってきました。小澤征爾さんの訃報です。いまから半世紀前、若き指揮者の思い切った行動が日本交響楽振興財団誕生のきっかけとなりました。小澤さんの活躍が世界の目を日本に向けさせ、わが国の存在感を高めることになりました。心からお悔やみ申しあげます。

□2024年３月１日現在の理事、監事、評議員、顧問は次のとおりです。理事：会長　日比野隆司、専務理事　久保田政一、大谷康子、三枝成彰、高松則雄、新沼宏、林寛爾、監事：岸本政昭、藤原清明、評議員：海老澤敏、小宮山淳、佐沢英紀、寺西基之、後藤篤樹、根本勝則、堀正文、顧問：岩沙弘道、榊原定征、早川茂、原良也（敬称略・順不同）。

公益財団法人 日本交響楽振興財団

〒101-0047　東京都千代田区内神田３－９－３
電話 03-3253-2032　FAX 03-3253-0566
編集・発行人　林 寛爾

E-mail　nihon@symphony.or.jp
ＵＲＬ　https://www.symphony.or.jp

2024年３月５日発行